

SY1-4

## 子どもの食べる機能への気づきと対応 ～小児歯科医としての地域活動～

加藤 真由美

くばがわ歯科医院

全国的な少子高齢化とともに小児齲蝕減少も顕著となり、子どものむし歯予防に対して関心がうすくなっている。その中で我が沖縄県も年々齲蝕減少傾向にあるが、3歳児齲蝕有病者率及び12歳児1人平均齲蝕歯数は全国最下位が現状である。その為地域活動の一環としてむし歯予防効果の高いフッ化物洗口を、保育園及びこども園へ推進実施している。

「人生100年時代」に突入したと言われている現在において、健全な口腔機能の維持は高齢期において全身の健康を支えるうえで重要な要素であり、成人のオーラルフレイル予防には小児期において健全な口腔機能の獲得が必要であることが示されてきている。これまでの小児歯科医療は齲蝕処置を中心とした形態的な回復維持に重点として、健全な歯列・咬合の獲得を目指してきた。2018年に公的医療保険の対象として小児の「口腔機能発達不全症」が新たに導入されたことで、形態的な要素に加えて口腔を形成する口唇・頬・舌など周囲軟組織機能の発達支援をすることも重要な要素となってきている。嘱託医をしている保育園及びこども園での歯科健診時に口腔機能を中心とした歯科保健調査を実施したところ、乳歯萌出中の(1歳～2歳児)の保護者の方が、指しゃぶり、おしゃぶり、食べる量が少ない、噛んでいない等の食べ方に対する回答が多数見られた。乳歯列完成期(3～5歳児)においては食べる機能よりも歯並び、発音、しゃべり方に関心が高くなっている。口腔習癖に関しては年齢問わず悩んでいる保護者の回答がみられた。コロナ禍の現在において常時マスク装着の生活環境の影響と思われる、上顎前歯部の歯肉炎・着色及び口臭の相談も増えている。2019年の授乳・離乳の支援ガイドの改訂により地域における授乳・離乳の支援推進における歯科医師の役割も明記されている。それにより、離乳・授乳の支援も地域の保育施設及び産婦人科への関わり方も円滑になってきている。沖縄の子ども達においては、むし歯予防の活動が中心であり保育士の方々もその事に熱心に取り組んできている。今後は、むし歯減少の先に見えてくるものとして、沖縄の子ども達への食べる機能の気づきと対応に小児歯科医として地域に関わる事ができる段階まで進んできている事について報告する。